

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 9 日現在

機関番号：32612

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520578

研究課題名(和文)古英語と中英語の継続を重視した中世英語統語論

研究課題名(英文)Medieval English Syntax with special reference to the Continuity between Old and Middle English

研究代表者

小倉 美知子(Ogura, Michiko)

慶應義塾大学・文学部・教授

研究者番号：20128622

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円、(間接経費) 1,170,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は英語統語論を、中世に焦点を当てて捉え直すことで、その歴史的変遷をより分かり易く例証することを目指した。それによりゲルマン本来の性質を残す古英語と、ノルマン・フレンチ、古ノルド語等の影響を受ける中英語との間の統語的継続を重視し、ラテン語文献の翻訳・抄訳・自由訳により培われた書きことばの伝統が、9世紀から13世紀まで形態的变化を受けながらも統語的には受け継がれていたことを、現存するテキストを綿密に調査することで証明しようと試みた。古英語と中英語の「過渡期」という概念は学者により異なるが、古英語後期から中英語初期をつなぐ詩編注釈・説教集・年代記等に、その継続と変遷の跡を見ることができた。

研究成果の概要(英文)：The continuity between Old and Middle English has been argued for decades. Morphological changes from late Old to early Middle English have been so conspicuous that many scholars emphasized the discrepancies between the two periods. When extant texts, especially those of the transitional period (from 11th to 13th centuries), are closely examined, however, it becomes manifest that the Anglo-Saxon scribes chose syntactic patterns which they inherited from their Germanic ancestors and used stylistic varieties in order to translate, paraphrase or modify the Latin texts they based on in their everyday practices. This study exemplifies these devices in Old English syntactic structures and tries to prove the continuity between the two periods of the medieval English.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：古英語 中英語 統語論 文献学 英語史

1. 研究開始当初の背景

研究を始めた当初は、従来の英語史の書き方がほとんど同じで統語論の部分がごく短いこと、近年海外で大学出版の共著の形で国際学会の議論を中心にした英語史が書かれるようになってきたこと、さらに電子コーパスに頼って統計を重視し実例を軽んじる傾向が出てきたことに危機感を覚えていた。そのため、応募者本人が、統語的变化の顕著な中世の時代に視点を置き実例を重視するような英語史を書くことを決意した。

2. 研究の目的

本研究は、およそ9世紀から15世紀までの中世の時代の英語に起こった変化を、統語論的見地から文献を重視し適切な例によって跡づけ、従来の英語史研究とは異なり古英語期と中英語期の継続を強調する形で提示することを目的とする。継続を重視する背景には、古英語期の文献がラテンの原典に基づくものが多く、その伝統が少なくとも13世紀までは継承されていたこと、中英語期からのノルマン・フレンチや古ノルド語の影響を強調する前に、アングロサクソンの文献の担い手が、祖先から受け継いだゲルマン的構文を駆使してラテン文献を訳出していく過程で、ノルマンやノルド語話者にも共通するゲルマン的特徴が、形を変えつつも受け継がれていったことを証明するつもりである。

(1) 従来の経験を積んだ研究者が書く英語史は読み応えがある反面、統語論では実例が少なく、形態論や語彙論とは違い納得のいく説明に欠けていた。ここ数年、新たな傾向が現われた。その一つは海外の主要大学(オックスフォード、ケムブリッジ、マンチェスター、アムステルダム等)の出版社から、国際学会の議論の成果をまとめる形で何人かの研究者が中心になった共著の形で「英語史」の名で出版する傾向である。その結果、まだ十分に検証されていない理論が部分的に挿入されたり、英語史上重要で従来は必ず記載されていた事項が省かれたりするが生じている。もう一つの傾向は電子コーパスの発達とその過度な利用で、コーパスに収録されている例でないと受け入れない若手研究者が増え、写本研究の基礎を経験せずにコーパスのみで調査して博士論文を書き中世研究者となって史的統語論の中心者となってきていることである。すると、自身の理論で分析できない構文に遭遇すると分析不能としたり、現存しない構文の影響がケルト語等からあったのではと推測したりする。推測・憶測を極力避けるよう学んだ文献学の徒としては、受け入れ難い傾向である。オックスフォードで古英語統語論の第一人者であったブルース・ミッチェルの弟子のひとりとして、文献学的立場に立つ中世英語統語論を執筆する必要性を強く感じている。同時に、ミッチェルが古英語との違いを認めながら手

を付けることのなかった11世紀から13世紀の過渡期の文献にも、大いに言及するつもりである。

(2) 本研究の目的が中世に重点を置いた統語論の執筆にあるので、出来得る限り国際学会への出席・発表を通じてこれまでの研究仲間と意見交換し、時代の潮流に合わず軽視されることのないような形で研究をまとめていくことを心掛ける。これまでも研究してきた構文の史的变化に加えて、英語史で扱うべき構文には必ず触れ、古英語と中英語の文体、特に中英語では方言的差異にも目を配りながら執筆していく。先にも述べた通り、電子コーパスの使用は必要不可欠となってきた。コンピューター・コーパスは形態論と語彙論では通時・共時的傾向を見る上で確かに有意義であり、統計的誤差は最小限に抑えられるであろうが、テキストの前後の文脈の文体的工夫による構文の選択などの例を見落とすことにもなりかねない。また、写本に問題がある場合はコーパスでは記号で記してあるだけの場合が多いため、どのような問題があるのかを校訂本からファクシミリ、時には写本にまで戻って確かめる必要がある。そのような精密な調査をもとに、一冊の本だけではなく、何編かの論文を書いていくつもりである。

3. 研究の方法

(1) 一つには資料の収集と検証である。電子コーパスのうち古英語辞書(DOE)は校訂本に基づいて作成されており、新しい校訂本が出版されるとそれに置き換える作業も行われている。理論言語学の立場でこれを使う研究者はこのコーパスの表示に従って例を引用するため、我々文献学の立場の研究者が校訂本のままのページ・行数で引用しても、DOEの文の区切り方に従った引用と一致しないと、同じ例でも認識しないという場合があり、不便さが生じている。校訂本の無いものはDOEのスタッフが写本から転写しているためそれに従うが、校訂本間の違い、写本の読みの違いに関してはDOEの記号(< >)に対してそれ以上の説明をせずに例のみ用いる傾向がある。従って文献学の徒としては、例はDOEの記述に従っても、その例に対し注釈を加え、例文の前後の節も取り上げて、現代とは違う句読法により挙げられている例文が主節か従属節か、接続詞なしの並列構文かなど、必要な説明を加えて、例の適切さを説得することが肝要である。このため、これまで収集してきた例をDOEに突き合せて検証しながら選択していく作業がまず基本となる。中世英語の前期と後期の継続を確認するために、詩と散文の双方から資料を取ると共に、説教集の伝統を10世紀後半のエルフリッチ(Elfric)以前と以後、さらに過渡期を経て13世紀までの資料を中心に類似する内容の表現的相違を探る。またラテン原典が

なり特定できるもので、行間注釈と翻訳・自由訳の比較のできる聖書福音書および詩編を徹底的に調査する。また古英詩には独特な統語的則があるため、特に詩編 51 - 150 の *Paris Psalter* や *Metres of Boethius* は、行間注釈や散文訳との相違について十分注意しながら記述する。さらに過渡期(1100-1300)は説教集のほか年代記も資料とするため、散文の *Peterborough Chronicle* から韻文の *Lazamon's Brut* への文体の変化に伴う統語的变化を見る。後期中英語(13-15 世紀)では特に方言間の差異に注目し、各方言における主要作品を取り扱うと共に、14 世紀以降の標準語化の傾向にも気を配りながら例を集める。中英語辞典(MED)は抜粋ながら引用例に写本情報が付けられているため、写本間の比較による構文の相違を検証できる。

(2)二つには学会での発表と意見交換である。2011 年 9 月には応募者が創設した英語史学会(略称 SHELL)を開催する予定であったが、同年 3 月の東日本大震災によりイギリス等の政府の勧告を考慮して 1 年延期し、その代わりに同年 7 月にロンドン大学で開催のロシア・イギリス国際会議に参加、また 8 月には大阪で国際コーパス学会、12 月には東京で日本中世英語英文学会の会長として講演、2012 年 6 月には同じ学会の東支部で講演、9 月に英語史学会、12 月にはミュンヘン大学で弟子の博士論文審査員を務めると共に別の大学でも講演することとなり、2013 年には近代英語協会が 30 周年を迎えるにあたり記念シンポジウムを企画することになった。さらに国際英語正教授学会(IAUPE)の国際委員となることが予定されていたため、7 月中国(北京)に赴くことになった。これらの学会で発表すると共に、学会で会う国内外の研究者達との意見交換を通じて、研究のまとめ方と公表の仕方を探ることになる。

4. 研究成果

(1) 研究期間中に、必要な文献例はすべて集め、適切な例を選択してそれぞれの論文・著書に掲載した。まず 9 世紀から 11 世紀の散文における構文の変化を調査、テキストごとに特徴のある構文をまとめ比較することにより、理論言語学で主張されるような OV から VO への語順の変化はさほど顕著でない反面、目的語が代名詞であれば OV 語順は普通にみられること、*beon/wesan* と共に用いられる過去分詞は形容詞として機能しながらも、*habban* と共に用いられる時には使役と共に完了ととれる構文も少なくないこと、*beon/wesan* + 現在分詞はやはり形容詞的機能から記述的表現であることが多いが、動詞によっては時間的継続も表わし得ること、人称と非人称の文体的交替、能動・受動と共に現われる不定代名詞の *man* など、従来は中世前期から後期にかけての変化とされていた統語的变化が、古英語テキストの中に散在する様子を見てとることができた。また方言的

には、古英語では詩編にみられるラテンの訳語としての語彙の選択にほぼ留まること、過渡期から中英語期でも顕著なのは語彙と形態の相違であり、統語的な相違はジャンルの違いとして文体的に目立つようになる。ロンドン方言の標準化が成される故に、そこで用いられる統語法が地域性を写すものとは言い難い。古英語・中英語の統語的継続は言えるものの、過渡期における写本の少なさは補い難いところである。ともあれ、この成果の一端は『変化に重点を置いた英語史』と題して執筆を完了、出版を待っているところである。

(2) 国際学会への参加等をまとめると、まず 2011 年は 7 月にロンドン大学で開催されたロシアとイギリスの共同の国際学会に参加・発表すると共に、ロンドン大学の Jane Roberts、オックスフォード大学の Eric G. Stanley と意見交換を行い、この研究への賛同を得た。実際、英語で出版するようにとの示唆も受けた。8 月には大阪でのコーパス学会で発表、ヘルシンキ大学の Irma Taavitsainen やグラスゴー大学の Jeremy Smith から意見を聞き、さらに 12 月には日本中世英語英文学会の会長講演を行うと共に、ゲストとして迎えたハーバード大学の Daniel Donoghue と旧交を温め、彼の専門である古英詩についての意見を聞いた。2012 年には 6 月に日本中世英語英文学会東支部でも講演を頼まれ、会員と懇談、8 月にはスイスで国際歴史英語学会に参加しながら Ian Kirby と会談し、翌年国際英語正教授学会に参加するよう勧められた。9 月には応募者が創設した英語史学会の国際委大会を慶應義塾大学で開き、創設当時から助言して下さったポーランド、アダム・ミッケビッチ大学の Jacek Fisiak と Liliana Sikorska を招き、またリーズ大学の Joyce Hill とミュンヘン大学の Hans Sauer も招いて、本会の後にさらに講演を頼み、国際学会にふさわしい内容のあるプログラムを組んだ。また 12 月には、Hans Sauer の下で博士論文を執筆した元の弟子の論文審査のために渡航、審査員として多くの研究者と意見交換する機会を得、さらにヴュルツブルグ大学大学院で講演を行った。2013 年には、近代英語協会の 30 周年記念シンポジウムを企画、「英語史研究における HTOED の役割」と題して 3 人の講師による歴史意味論・語彙論の研究発表を行った。また 7 月には北京での国際英語正教授学会に赴き、本会に先立つ中世シンポジウムに参加して発表、本会では 2 つの発表をし、その場で 12 人の国際委員の一人に選ばれ、さらに 4 人の実行委員にも選出されて、会長となった Jane Roberts の下で 2019 年まで務めることとなった。学会発表はそのほとんどを出版することができた。

(3)先にもこの研究成果を英語でも著書とし

て出版してはどうかという示唆を受けたと書いたが、実際、海外からの出版の機会が与えられており、ここ1年の間に、日本語のものとは違うより専門的な書き方での出版を考えている。写本が次々と電子化され、元のものを手に取って見ることが難しくなっていること、我々の世代の次の研究者達は電子コーパスを使って博士論文を書くように訓練され始めていること、我が国の若手研究者達もそれを見習い始めていることを考えると、文献学の担い手の一人として、コーパスを使いながらも確実な研究成果が得られるように、テキストから選び取る例の検証に時間をかけなければならない。中世英語の統語論は、写本の句読法が現代とは違うことをまず念頭に置いた上で、アングロサクソンの書き手がラテン原典を訳出しながらその文法を作り上げていった経過を、出来るだけ間違いの無いように記述することから始めなければならないと、次代に知らせる必要性を痛感している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 5 件)

Michiko Ogura, "Words and Expressions of Emotion in Medieval English", *Studies in Medieval English Language and Literature*, 査読有、vol. 27, 2012, 1-38.

Michiko Ogura, "God's Love and Love of God", *Poetica*, 査読有、vol. 75, 2011, 49-67.

Michiko Ogura, "Interpreting the Differences in Signification among Historically-Based Dictionaries of English", *Florilegium*, 査読有、vol. 26, 2011, 67-83.

Michiko Ogura, "Japanese Analogues of *Beowulf*: from a viewpoint of Medievalisation", *SELIM*, 査読有、vol. 16, 2011, 7-22.

Michiko Ogura, "The Grammaticalisation of the Old English Imperatives *weald* and *loca*", *Notes & Queries*, 査読有、vol. 58.1, 2011, 10-14.

[学会発表](計 10 件)

Michiko Ogura, "OE *standan* as a Copula", 国際アングロサクソン学会、2013年8月2日、ダブリン大学、アイルランド。

Michiko Ogura, "Lexicalisation of Christianity, or Christianisation of the Anglo-Saxon Vocabulary", 国際英語正教授学会本会、2013年7月18日、Tsinghua University, 北京、中国。

Michiko Ogura, "Old English

Periphrases", 国際英語正教授学会本会、2013年7月16日、Tsinghua University, 北京、中国。

Michiko Ogura, "Old English Construction ' *beon/wesan* + present participle ' ", 国際英語正教授学会 Medieval Symposium, 2013年7月13日、Beijing Foreign Studies University, 北京、中国。

小倉美知子, 「語彙のキリスト教化とキリスト教の語彙化」, 近代英語協会、2013年7月6日、愛知大学。

Michiko Ogura, " ' Ambiguity ' in Old English ", 国際英語史学会、2012年9月2日、慶應義塾大学。

小倉美知子, 「古英語における迂言形 特に ' *beon/wesan* + present participle ' の使用について」, 日本中世英語英文学会東支部、2012年6月16日、信州大学。

Michiko Ogura, "Words and Expressions of Emotion in Medieval English", 日本中世英語英文学会、2011年12月3日、大東文化大学。

Michiko Ogura, "How ambiguous were Old English ambiguous forms? West Saxon and Wycliffite Versions of the Gospels in comparison ", 第2回国際中英語・現代英語コーパス学会、2011年8月28日、大阪大学中之島センター。

Michiko Ogura, "Verbs with Personal, ' Impersonal ' and Reflexive Constructions in Medieval English", The 2nd International Scientific Conference: Language, Culture and Society in Russian/English Studies, 2011年7月25日、ロンドン大学、イギリス。

[図書](計 7 件)

Michiko Ogura, Peter Lang, "Two Syntactic Notes on Old English Grammar: (1) OE *beon/wesan* + present participle, (2) OE *standan* as a Copula", in Michiko Ogura (ed.), *Aspects of Anglo-Saxon and Medieval England*, 2014 出版予定、200 (うち40)。

Michiko Ogura, 英宝社, "Lexicalisation of Christianity, or Christianisation of the Anglo-Saxon Vocabulary", in *Studies in Modern English: The Thirtieth Anniversary Publication of Modern English Association*, 2014, 85-100.

Michiko Ogura, Peter Lang, *Words and Expressions of Emotion in Medieval English*, 2013, 345.

Michiko Ogura, Société Néophilologique, "Verbal Periphrases in Old English", in *Ex Philologia Lux: Essays in Honour of Leena Kahlas-Tarkka*, 2013, 57-79.

Michiko Ogura, Peter Lang, “ Ambiguity in Old English ” in Michio Hosaka, Michiko Ogura, H. Suzuki and A. Tani (eds.), *Phases of the History of English*, 2013, 161-178.

Michiko Ogura, King ’ s College London, “ Verbs with Personal, ‘ Impersonal ’ and Reflexive Constructions in Medieval English ”, in Jane Roberts and E. Volodarskaya (eds.), *Language, Culture and Society in Russian/English Studies*, 2012, 14-24.

Michiko Ogura, Peter Lang, “ *Hap, Happen and Happy: their Borrowing and Development through Rivalry* ”, in R. Bauer and U. Krischke (eds.), *More than Words: English Lexicography and Lexicology Past and Present. Essays Presented to Hans Sauer on the Occasion of his 65th Birthday Part I*, 2011, 207-223.

〔その他〕

Michiko Ogura, “Periphrastic Expressions in Old and Middle English”, ドイツ、ヴュルツブルグ大学院での講演、2012年12月19日.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小倉 美知子 (Michiko Ogura)

慶應義塾大学・文学部・教授

研究者番号：20128622